

日本列島におけるもう一つの方言分布境界線 “気候線”

“The Climate Line” in the Japanese Archipelago and East Asia:
The Relation between Climate, Culture and Languages.

安 部 清 哉

日本列島におけるもう一つの方言分布境界線 “気候線”

安 部 清 哉

プロローグ

『気候線』総合図として、図1に示す5本の方言分布境界線を見た方は、その位置と曲線にある程度の類似性があることを、およそながらも認めただけのことであろう。

では、それらが、どのような方言事象の、どの語形の境界線であるか、ということになると、その5つすべてを言い当てるのは、方言研究者でも、必ずしも容易ではないかと思われる。なぜなら、これまで、この5つの方言分布は、その境界線の類型という視点からは、注目されてこなかったからである。

このうち、3つ（「霜焼け」「フクロウの鳴き声」「旋風」）は、後述するように、気候との関わりが、既にいくたびか指摘されてきている。

しかし、そこにおいても境界線として重ねてみることは、管見の限りでは、かつて試みられることがなかった。それほどに、意外な重なりとなるこの境界線の発見は、既に特徴が広く知られ、先入観をもってながめられてしまうそれら3つの地図からではなく、予想外であったがゆえに問題としていささか長く意識された、意外な5枚目の方言地図に、その発端がある。

それは、東北方言語形として、方言研究者には著名であり、また、俚言一語としては、少なくない数の、文献資料での用例を扱った論文（いま省略する）をもつ「ネマル」の分布図の境界線の問題から始まる。

『日本語地図』（LAJ）51図「座る」と52図「あぐらをかく」の「ネマル」の分布のみを取り出し、一枚の地図に描いてみると、その南の境界が、奇麗な一本の曲線になっていることに気が付

く(安部1989・3掲載)。

ネマルの南限の境界が示す一本の曲線は、単なる偶然のラインと思えないほど鮮やかであるが、その位置にこのような曲線が走っていることを指摘したものは、かつてなかった。また、類似の分布もすぐには探しがたいように思われた。

解釈がつかないまま、しばらく保留されていた「ネマル」が、類似した曲線と出会うのは、加藤正信(1989)掲載のいくつかの地図を見ていた時だった。加藤氏の描いた「手拭いが」凍る」の簡略図の曲線が、「ネマル」の南限線と平行しているのを見てとることができた。

この2本だけでは、一般には類似しているとは見ないであろう。また、本稿執筆者も、それ以前なら、おそらくは類似に気づかなかったであろうと思う。ちょうどその頃、拙論の「関越線」を確認するに至り(補注)、かなり幅のある境界線の存在を知ることによって、地図を見る意識が変っていたことが、幸いした。

この「シミル(手拭いが凍る)」の地図は、それまで加藤氏以外に境界線を引いた例がない(記号による簡略図のみ)(注1)。筆者も、寒い地方に共通する方言という程度にし意識していなかったように思う。

その「シミル」とこの「ネマル」の線が類似するなら、ネマルの

分布は日本海型分布ということになり、気候に関わる可能性がでてくる。気候に関わるなら、次に類似するのは、加藤氏も挙げる「霜焼け」のほうである。

「霜焼け」なら、柴田武(1963)に境界線が出ているので、柴田博士が描いた線がそれらと重なるはずである。「霜焼け」が関わるなら、次に重なるはずであるのは、佐藤亮一(1989)が「霜焼け」と共に「日本海型」として挙げる、「鼻の鳴き声」と「むじ風」のほうである。

こうして、5本の境界線は、ひとつずつ重ねられていき、そして一つに重なることになった。

この位置に、「気候」を背景とした境界線があるなら、おそらくすべてのものが、長い年月にわたって、この「気候」という自然の強大かつ絶大なる影響を受け続けてきたはずである。そして、そのような気候線であるなら、それはユーラシア大陸まで延びているはずである。

ここに挙げたものは、このようにして、明らかになった、日本列島上の南北方言境界線「気候線」である。

27図の「霜焼け」解説では、柴田武(1963)を挙げている。

しかし、柴田博士の卓見にも関わらず、LAJの中の「日本海対太平洋型」を追加指摘する研究は、その後多くは見られない。

真田信治(1979)になって、「旋風」の無回答が、その現象の有無と関わって気候と関係していることが指摘された。

また、続く真田信治(1981)は、「霜焼け」「鼻の鳴き声」「旋風」の3地図を、「日本海型方言分布パターン」と再命名した。確かに、語形「シモヤケ」「ノリツケホーサー」「無回答(名称無し)」は、「日本海型」である。しかし、それ以外の分布語形との地理的対照を対比的に明確にし得て、しかも、後述のように、気候の対称的相連との関連も、より明かになるといふ点において、やはり柴田博士の「日本海対太平洋型」の方が類型把握として有意である。

「全国分布の類型」として、再び「日本海対太平洋型」を取り上げたのは、管見の限りでは、佐藤亮一(1986)になる。そこでは、「霜焼け」のほかに、その類似例(1)日本海側(2)として、「鼻の鳴き声」「旋毛」が挙げられている。

次に、その「日本海対太平洋型」に事例が追加されるのは、加藤正信(1989)になる。加藤氏は、「東西型」に対比させる意味

LAJの中で、これまでの研究で、気候との関わりが指摘されている地図には、次のものがある。

①シモヤケ(LAJ127図)「しもやけ(凍傷)」

②無回答・タツマキ(LAJ264図)「つむじ風」

③ノリツケホーサー・ノリツケホーサー(LAJ298・299

図「鼻の鳴き声」

④シミル(LAJ97図)「手拭いが凍る」

その最も早い指摘は、LAJの中間資料を報告した、柴田武(1963)の「霜焼け」の指摘である。柴田博士は、「霜焼け」の一事例によって、「日本海対太平洋型」を分類類型の1つと洞察された(論文では、当時の用語によって、「裏日本と表日本が対立する型」と表現されている)。

その後刊行された『日本語地図』(LAJ)の「解説」では、「霜焼け」(ユキ)と「鼻の鳴き声」(ノリ)について、冬の気候が関係していることが指摘されている(299図解説参照。1

で「南北型」という分類名のもと、「霜焼け」と、「凍る」における「シミル」を挙げた。

ところで、先に、「対照」という意味で「日本海対太平洋型」の名称が勝ると述べたが、実際の分布は、東北地方においてはその対立が見られない。加藤氏の「南北型」の名称が、より分布の実態に適っていることが明らかである(注2)。

全国方言分布の類型名としての変遷

(裏日本対表日本型)→日本海対太平洋型→日本海型→南北型

なお、加藤氏は、シミルについて、「これは気候のほか、いわゆる裏日本、北日本は、辺境として古い語が残っているという、文化的、歴史的要因も考えておく必要があるかもしれない。」ことを示唆されている(本稿で以下に指摘するさまざまな現象を見るとき、この加藤氏の指摘は、注目すべき洞察というほかない)。

このように、柴田博士の「霜焼け」1事例からの類型は、その命名や分類視点を微妙に変えながらも、LAJの当時の担当者であった研究者によって、上記4地図まで追加補充された。

しかし、これまで、柴田博士の「根雪」の地図(図8)以外に、気候と関わる裏付け資料を追加確認したものはなく、また、4図の

境界線を重ねてみる作業も試みられることはなかった。

以下では、これらの地図を確認しながら、類似する境界線をもつ「ネマル」を加えて、その南限境界線を重ねてみたい。

(2)「南北型」5方言地図

①シモヤケ(LAJ「霜焼け」)——柴田武(1963)

図3は、柴田武(1963)が挙げた、LAJの途中報告による簡略図である。シモヤケとユキヤケの境界線が描かれている。柴田博士は、「根雪が25日間以上の地域」を示して(図8参照)、「豪雪地帯ときわめてよく一致する」ことを指摘し、冬の気候と方言分布との関わりを、はじめて具体的資料で明かにされている。

②無回答・タツマキ(LAJ「つむじ風」)——真田信治(1979)

真田信治(1979)は、日本海側では、冬の降雪や風の関係で、その現象が確認しがたいか、あるいは、稀であるため、無回答やタツマキによる代替え回答が多くなった可能性を指摘された。

図4は、真田氏や佐藤(1986)の指摘を受け、タツマキと無回答とが、ある程度まとまって隣接している分布領域に着目し、しかも、その分布の南限を境界線としてつなげて、今回新たに描いたものである(佐藤亮一1991の略図を利用)。

境界線の北側でも、東北北部は、実際には、マキカゼの分布が広く、タツマキも無回答もあまり多くはない。しかし、この境界線によって、この分布の特徴をより明確に把握できることがわかる。

③ノリツケホーサー・ホーサー(LAJ「巢の鳴き声」)——佐藤亮一(1986)

LAJ「解説」(1975)に、「ノリ」を主とした「ノ」類の分布地域は、「天候、特に冬の天候に生活の左右される地域と言うことができようか。」と指摘されている。

佐藤(1986)では、「解説」より明確に、「ノリツケホーサー」「ノリツケホーサー」は、「この地方で冬期に晴天の日が少なく、洗濯物の乾きを心配するために、鳴き声が『糊をつけて干せ(干せう)』と聞こえるのだという説があるが、そうであるとすれば、『しもやけ』の図におけるユキヤケ(中略)と同様に、天候と方言分布とが密接に関わる例と言える。」と指摘されている。

図5は、299図のノリツケホーサー類(緑色)の南限線を一本の境界線として描いたものである(その境界線より南にある地点は丸で示している)。「旋風」の場合同様に、境界線の北側であっても、青森・岩手には分布がないが、他の境界線との類似が明確となる。

④シミル(LAJ「手拭いが」凍る)——加藤正信(1995)

図6は、加藤正信(1989)に示された簡略図であり、「氷が凍る」の図に「手拭いが」凍る」におけるシミルの境界線が描かれている。一部、安部が点線で補正した部分があり、図1「総合図」では、補正線の方を使っている。「氷が凍る」のシミルの方も、古くは、同じ範囲の分布をもっていたものと推定される。

⑤ネマル(LAJ「座る」)「あぐら(胡座)をかく」——安部(1989)

『日本語地図』(LAJ) 51図「座る」と52図「あぐらをかく」の「ネマル」の分布のみを描いたのが、図7である。その南の境界が、奇麗な一本の曲線になっている。安部(1986・198

(8)で「三周辺分布」(当時・三辺境分布)を取り上げ、その類似分布を集め、まとめていた作業の中で見出したものであって、当初は「三周辺分布」の特徴に着目した語形であった(安部1989・3に掲載)。

図7のネマルの南限の境界が示す曲線には、①④の4図との類似が指摘できる。しかしながら、他の4図が明らかに気候に関わる現象であるのに対して、この項目だけは、直接的には気候との関係が見出しがたい。

気候と関わる部分があるとすれば、加藤(1989)が示唆されたように、「いわゆる裏日本、北日本は、辺境として古い語が残っているという、文化的、歴史的要因」が、共通項として背景にあった可能性が考慮される。

ネマルは、文献資料にも多く見られ、俳諧での例から見ても、江戸期には関東地方でも使用された可能性がある。古くは、L A Jでの分布よりも南にあったものが、南側の中央語によって、北部に押し上げられた結果を示すのであろうか。

ネマルの分布が、実際に気候と関わる現象であることを示すものは、今のところ、境界線の類似以外には認めがたい。今後、文献資料によって、その使用者や地域、用法を確認した上で、改めて検討する必要がある。ここでは、他の4語とは別に扱って置くことにし

たいと思う。

(3) 方言分布に投影した気候境界線

(2)で見てきたように、①④の4図は、気候と密接に関わっている。4図の境界線を、「ネマル」も含めて、重ね合わせたのが、図1「気候線総合図」である。(参考までに言い添えれば、境界線は、①「霜焼け」は柴田地図、④「手拭いが凍る」は加藤地図、⑤「ネマル」は安部地図(1989)を使い、②「旋風」③「鼻の鳴き声」は、他の境界線を見ずに、個々に描いてから、5つの図の境界線をそのまま重ねたものである。その振れ幅には、作図者の判断による誤差も含まれているから、今回の重なりを考慮した上で、それぞれの図における境界の位置を再検討すれば、重なりがより強くなり得る余地を残している。)

部分的に幅のある地域(中部地方)もあるが、その曲線がよく一致しているのが見てとれよう。ネマルを別にすれば、特に、岐阜県西部から広島県東部までは、作図者の誤差を含めれば、ほぼ一本に重なっていると言えよう。栃木県と新潟県の間でも境界線が狭くなっている。

一方、地形の問題があるとはいえ、気候自体が、地理的にそう急

激に変わり得るものではないので、この境界線の幅は、気候の変化する境界帯とも言えるであろう(図2)。この「気候線総合図」の最も南の線が、気候の影響による古い方言境界を留めている、という見方もあり得るかもしれない。

その総合図の解釈は、今後も検討が必要であらうと思うが、ここに、この図を、「糸魚川・浜名湖線」、また、拙論の「関東・越後線(新潟・利根川線)」と並ぶ、日本語におけるもう一つの方言境界線として提示したいと思う。

「ことば」に、これ程の痕跡を残す気候の境界線であるなら、実際の気象現象においても、「根雪」の現象以外に、もっと多くの現象が指摘できることであろう。また、その気候の影響は、さらに多くの現象に及んでいるであろう。

以下では、紙幅の都合もあるので、それらの現象について、拙稿での先行報告を踏まえて、箇条書き的に報告しておくことにしたい。

二、気候線と気候学

1で見たように、柴田武博士は、「霜焼け」の方言に関わる気象現象として、北側(日本海側)のユキヤケの語形ユキ(雪)に着目し、雪を長く目にすることになる根雪の期間の分布図(25日間以上の地域)を提示された。

「霜焼け」「旋風」「鼻の鳴き声」「凍る」のいずれも、特に冬期の気候にその影響が限られているように見受けられる。

しかし、気候学の研究領域を広く見渡すと、「南北型」の分布境界線に類似する境界線をもつ気象現象は、根雪や冬期の気象現象に限られていないことがわかる。

以下、そのいくつかを挙げる。(該当地図は、掲載拙論参照。以下のタイトルも、原則として、拙論掲載地図名による。)

- ①根雪が25日間以上の地域(柴田武1963)(図8)
- ②日本の最深積雪分布(安部1998・9)
- ③日本の根雪期間(同)
- ④日本の雪日数の分布(同)
- ⑤日本の気候区分(同)
- ⑥日本の気候区(追加地図参照)
- ⑦2500年〜2000年前の日本の古気候(未掲載)
- ⑧最終氷期における雪線高度分布図(安部1998・9)

三、気候線と土壌学

土壌の分布の相違には、間氷期の気候などが影響しているという。

- ①日本の土壌分布(安部1998・9)

四、気候線と植物学

気候が最も影響するのは、生物でも、まず自らの意志では移動できない植物であろう。植生分布は、気候の様々な影響を受けるので、植物の分布も、実際には、植物それぞれによって様々であり、ここに挙げる気候線による相違ばかりではないことは、注意しておく必要がある。

- ① 縄文時代の森林分布 (安部1998・3)
- ② アラクシの分布 (安部1998・9)
- ③ オオイタドリの分布 (安部1998・9)
- ④ チシマザサの分布 (未掲載)
- ⑤ ニシキウツギとタニウツギの分布の境界線 (未掲載)
- ⑥ エズリハの分布 (未掲載)
- ⑦ エゾユズリハの分布 (未掲載)

五、気候線と動物学

気候は、生物全般に影響している。

- ① イエネズミの第1染色体の分布 (安部1998・9)
- ② トウヨウゾウの分布北限 (未掲載)
- ③ ヒグマとツキノワグマの全国分布 (未掲載)

④ イノシシの全国分布 (未掲載)

六、気候線と魚類学

淡水魚の分布は、気候の直接的影響というより、むしろ、人の手も影響した二次的な分布形成が関わっているものであるか。検討課題である。

① 淡水魚相より見た日本列島の地理区 (未掲載)

七、気候線と昆虫学

小さな生物ほど、気候の影響は大きいであろう。

- ① マダラテントウ属の分布 (安部1998・9)
- ② 日本のアオイボイビムシの分布 (未掲載)
- ③ イネクロカメムシの分布 (未掲載)

八、気候線と考古学

気候は、生物である人間の生活にも影響したであろう。気候線が、古気候にも認め得るとすれば、古代人の生活や交流圏・文化圏もそれに左右された可能性がある。

- ① 土壘墓の分布圏 (安部1998・3)
- ② 複式炉の分布 (未掲載)

- ③ 長方形大型家屋址の分布 (未掲載)
- ④ アスファルト付着物を出土する遺跡分布 (安部1998・3、ほか未掲載)
- ⑤ 画文帯神獣鏡の同型鏡分布図 (未掲載)

九、気候線と民俗学

人間の生活に影響したとすれば、生活習慣や風習、生活空間などの様々な面に影響が現れてくるだろう。

- ① 餅無し正月の分布 (安部1998・3)
- ② 民家の諸指標の分布 (同)
- ③ 本家・分家集団の呼称 (イットウ) (同)
- ④ 本家・分家間の序列と交際 (同)
- ⑤ 隠居の居住性 (同)
- ⑥ 長男・長女の類別呼称 (同)
- ⑦ 部屋の間取り型の分布 (安部1998・9)
- ⑧ 八幡信仰の広がり (未掲載)

一〇、気候線と食物文化

植物への影響はまた、栽培食物および食べ物文化という人間生活への影響となって現れる。

- ① 食べ物文化圏 (そば食文化圏) (安部1998・3)
- ② 栽培大豆の4つのクラインのうちの夏大豆ラインと秋大豆クライン (未掲載)

一一、気候線と日本史学

- ① 日本神話・神武天皇・倭健命の東征範囲 (安部1998・3)
- ② 屯倉の分布 (未掲載)

一二、気候線と日本語学

- ① 上代特殊仮名遣の異例率の分布 (東日本) (図9)

一三、気候線と文化人類学

- ① 頭長幅示数分布 (安部1998・3)

一四、東アジアの気候線と文化

- ① 中国の地方的習俗と気候線 (追加地図参照)

一五、気候線と日本文化研究の課題

気候の影響は、この列島全域に限無く及んでいるわけであるが、ここに挙げたさまざまな分布から、この位置における、南北を2分

するような気候の相違が、最も影響力が大きかったことが見てとれよう。

そのほか、該当する他の事例、境界線の位置、境界地域の解釈、それぞれの分布成立時期、など、今後の検討を重ねなければならぬ課題は少なくないだろう。

一方、この気候線が確認できたことによつて、それまでの方言分布のいくつかの特徴的パターンが説明可能となったばかりでなく、それまでは、関越線の影響があることまではわかっていながら、その関越線のみでは解釈し得ずにはいた、奈良時代の『万葉集』東歌・防人歌における、上代特殊仮名遣の異例の偏在分布の背景が、はじめに解釈可能になった(図9)。さらに、『古事記』『日本書紀』における記述とも一致しているところが確認できる(別の機会に述べることにしたい)。

ここに南北を分かつこの“気候線”は、東西を分かつ日本アルプス(フオッサ・マグナ)での境界線(方言学の糸魚川・浜名湖線)とは別の、日本列島上のもう一つの文化圏境界線をなしている、と位置付けることができるであろう。

【注】

注1 拙論で取り挙げている「関東・越後線」の発端と結末も、実は、同じ経緯をたどる。ネマルと同じ安部(1989・3a)に「目・マナ

97・7)要旨掲載の地図である(空欄は、一つには本稿の気候線を考慮したものである)。

1997・4、「一般書あべせいや(1997・4)は、ABE(1997・7)の内容を踏まえている。

1997・7、ABE(1997・7・2a)口頭発表。

1997・8、安部(1997・8)の英訳付き地図は、ABE Seiya(1997・7)で使用了もの。

1998・3、安部(1998・3・a・b)の一部は、ABE(1997・7)で使用了もの。(以下略)

あべせいや(1997・4)の一般書が、内容的にはこれらより先行し、また、編集上の依頼で第6章の前に第5章を置いたため、わかりにくいようであるが、上記の拙稿を踏まえたものになる。なお、これらの拙論は、溯って1994年冬に依頼があった、あべ(1997・4)の企画に応じ、それをまとめるために考察したものになる。

参考文献

大林太良(1986)『東アジアの文化領域論』(塩原和郎編)『日本人の起源』小学館
加藤正信(1989)『現代日本語 方言』『言語学大辞典』『日本語』三
省堂
佐藤晋平(1986)『日本人と文化のルーツをアジアに求めて』『日本古代史1 日本人誕生』集英社
佐藤亮一(1986)『方言の語彙』『講座方言学1 方言概説』国書刊行会
同 監修(1991)『方言の読本』(小学館)
真田信治(1979)『標準語の地理的背景』『日本の方言地図』中公新

「コ」の図を掲載し、同時に、安部(1989・3b)で「目」の図を単独で取り上げたが、メ・マナコの境界線の位置が疑問のまま残った。その後、類似する分布を集め、最終的にその位置を確定してくれたのが、加藤(1989)に再録された「有声化と鼻音化」の地図の境界線である。

その境界線も、シミルの境界線と同様、唯一加藤氏だけが引いているものであるが、それらは、決してたまたま偶然に引かれたものではなく、加藤氏にだけ「見えた」、必然的なものであったと言つてよいであろう。

なぜなら、この2本とも、加藤氏以前以後に境界線を引いた例がなく、また、「有声化と鼻音化」図の初出・加藤(1975)以後も、これらの境界線が引かれた加藤地図を取り上げた研究者は皆無なのである(「有声化と鼻音化」図は、当初、安部(1997・8)でも、大石・上村論文地図として誤引用している)。

その意味で、この2本の境界線は、ただ一人加藤氏にだけ「解釈」できたものだった、と言ひ得るだろう(この謂がおわかりになりにくい方は、幾何学における一本の「補助線」の発見の価値を、想起されたい)。

注2 徳川宗賢博士も、私信の中で「南北線」という名称を挙げられた(「あしがき」参照)。

補注

拙論の「関越線」に関わる拙稿の、国内・国外での発表順序が時期的に前後しているため、関連がわかりにくくなつていて誤解があるようなので、念のため時系列的に記しておきた。

1996・夏頃、ABE Seiya(1997・7)のための発表題目申込、1997・1、ABE(1997・7)のための要旨提出、名称「関東・越後線」の使用。

1997・3、安部(1997・3)。その86頁の図は、ABE(1997・7)の図を掲載したものである。

書

同 (1981)『日本海型方言分布パターン』『言語生活』360、筑摩書房。いま、真田(1989)『日本語のバリエーション』アルク社による
柴田 武(1963)『単語の全国分布』『人類科学』15、新生社
橋本萬太郎(1981)『現代博言学』(大修館書店、初出は図B1978・図A1980)
水島義治(1984)『萬葉集東歌の国語学的研究』(笠間書院)
安部清哉(1997a)『日本語地図』偏在分布Ⅱ語形地図集(『フェリス学院大学文学部紀要』32、平成9・3)
同 (1997b)『禿頭』の言語地理学的解釈と地方方言史の対照(『国語論究6—近代語の諸相』平成9・7、明治書院)
同 (1997c)『古代日本語の動詞重複形(reduplication)』一種の語法と方言分布及びその言語類型地理的問題(加藤正信編『日本語の歴史地理構造』平成9・7、明治書院)
同 (1997d)『もう一つの東西対立境界線』関東・越後線群——『外日本—中日本対立分布』『玉藻』33、平成9・8)
同 (1998a)『日本列島上の歴史と文化におけるもう一つの東西対立境界線』関東・越後線群——『広日本—中日本対立分布』『玉藻』33、平成10・3)
同 (1998b)『日本列島上の歴史と文化における分布境界線』関東・越後線群——『立正大学国語国文』36、平成10・3)
同 (1998c)『日本列島上の歴史と文化における分布境界線』関東・越後線群——『フェリス学院大学文学部紀要』33、平成10・3)
同 (1998d)『日本語におけるもう一つの東西対立境界線』関東・越後線群——『立正大学国語国文』36、平成10・3)
同 (1998e)『日本列島上の歴史と文化における分布境界線』関東・越後線群——『フェリス学院大学国文学会』、平成10・8)
同 (1998f)『日本列島上の歴史と文化における分布境界線』関東・越後線群——『フェリス学院大学国文学会』、平成10・8)

同 (1999a) 「古代語からみた『ひな』と『みやこ』——王化の最前線としての『あゝ家』——」『別冊歴史読本 日本古代史』王城と都市』の最前線『平成11・2、新人物往來社』

同 (1999b) 「東西方言の諸相と日本語史の課題」『日本語学』18-1-5、平成11・5)

同 (1999c) 「古代日本語における古い語彙・音韻と新しい語彙・音韻の言語類型論的比較研究の可能性」(佐藤武義編『語彙語法の最新研究』平成11、明治書院)

ABE Seiya (1997-7-28) "Several Strata in the Historical Formation of Japanese Dialects: 2nd International Congress of Dialectologists & Glottologists (cf. abstracts & hand outs, 1997-7-28-8-1, Vrije Univ. in Amsterdam, The International Society for Dialectology and Glottinguistics (国際方言学地理言語学会 第2回国際大会 口頭発表)

ABE Seiya (1999-8-5) "Climate, Culture and Language" (cf. abstracts & hand outs, 12th World Congress of Applied Linguistics (AILA '99 Tokyo), August 1-6, 1999, Waseda Univ., Tokyo, Japan, (第12回国際応用言語学会世界大会 口頭発表)

あふせいや (1997) 『日本語の起源——日本語のルーツを探った』(飛田良文責任編集、平成9・4、アリス館)

【付記】 本稿は、1999年度フェリス学院大学共同研究「異文化との接触における言語・コミュニケーションの受容と変容に関する文化論的研究」(代表・安部清哉、150万円)による研究成果の一部である。

【あとがき】

本稿の図1「気候線総合図」を、学会で最初にご覧いただいた方は、実は、故・徳川宗賢先生になる。

多くの方が同じように、その「徳川通信教育」を受けられたのであろう。お手紙を読み返しながら、先生に導かれて進んできたことを思いつつ、急に旅立たれて活字にはお残しにならなかった先生のお教えの重みを、いままさらながら感じている。

本論は、散漫な記述の文字通りの拙文であるが、徳川宗賢博士にささげたい。

【初校時追記】

14章を追加したところで脱稿としたが、その後、手元を集めてあった関連地図によって、後掲の「東アジア中央気候線」の地図が作成できることがわかった。また、それに関連するであろう地図4点を追加掲載することにした。

追加地図 「東アジア中央気候線」図A、図B、図C、図D
これによって、参考地図・表として載せた、「関東・越後線群」による「総合性優位方言／弁別性優位方言」の機能類型から理論的に導き出した、「音韻対応」の再構成の結果(II-表6)と、「気候線」によって区分される地理的歴史的背景とが、極めてよく一致していることが明らかとなった。つまり、後者が、前者を裏付ける証左になる、と位置付け得る可能性があることとなる。

「関東・越後線群」と「気候線」との相違と関連性など、解説すべき点は残っているが、今後の論を進めるについては、時を俟つことにしたいと考える。

安部(1999・5)に掲載するため徳川先生の地図の利用をお許しいただき、その御礼方々拙論をコピーし、いまこんな地図のことを考えていますとして「気候線総合図」を同封した。5月18日付けで、いつもと変わらぬ致のお葉書をいただいたが、それが最後のご教授になるとは夢にも思わなかつた。

私信は、私事の記述(略)もはばかられるのであるが、どのようなことをお考えであったのか、そのお考えが記された徳川方言学の記録としてお伝えすることをゆるしいただければと思う。

◎五月十四日付け 絵葉書にて
「お元氣に御活躍のようですね」と存じます。ありがとうございます。した。重複形のは思いがけない(多少は関心があつた)ものです。(略)歴史読本のは、類聚三代格の話など勉強になりました。飛騨以外で「言語他国に異なる」式の表現を与えられた地域はないのではありません。言葉・西と東はどうぞ御遠慮なく御使ひ下さい。(御礼送)

◎五月十八日付け 絵葉書にて
「玉稿拝受ありがとうございました。柳田説を大きくとりあげられた点が注目されます。気候線は南北線ではだめですかね。取り急ぎ御礼まで。/五月十八日/〇糸浜線が明治期に注目されたのは東歌との一致でしたね。」

徳川先生からは、このようなやりとりの中で、かつて「関越線」という名前をいただいたのであつた。
はじめてご挨拶できたのは、1985年秋に宮城学院大学で開かれた国語学会での発表後であつた。お送りした抜刷に対していただいたお手紙のフアイルは、1987年4月12日付から始まっている。その中には、関連する疑問をお持ちなので拙論を送って説明するよう先生に指示された、故・司馬遼太郎氏からのご返事もはさんであつた。
因に、司馬氏も、東西方言について、「東京弁の口は口蓋の奥で純粋子音

ているものである。

将来は、日本語の基礎的単語の地理的分布の調査が系統論研究と結びつけられるでしょう。国立国語研究所編の『日本語地図』は系統論研究の宝庫であることがわかる日が到来するのではないでしょうか。

このことばは、いまからもう26年も前になる。故・村山七郎氏のものである(村山(1973)「南方語と日本語」、江上波夫・大野晋編『古代日本語の謎』)。その村山氏のご批判を受けることも、もはやかなわなくなつてしまつた。

願わくは、日本の研究者諸先輩よ、この試論の公表を諒とされたい。
この方法が、ユーラシア大陸の、西端の海上の島国にたどりつた言語のこととは対照的に、一方の東の側のかんりの広域にわたつて、かつて展開したらしい言語の歴史を、おそらくは1万年という単位をもって再構成し得る、いま唯一残されている——そして、あるいはひょっとすると、この一瞬の「時代」のみが敵し得るような——最後のアプローチであるかもしれないのだから……。

1999・7・29 安部

【再校時追記】

本稿の一部は、本稿未掲載地図の一部及び追加地図5図とともに、参考文献に挙げた ABE Seiya (1999・8・5) の学会において発表された(発表申込切符1999・5・31)。

1999・8・15
(本学教授)

図1 「気候線」 総合図 安部清哉 (1999)

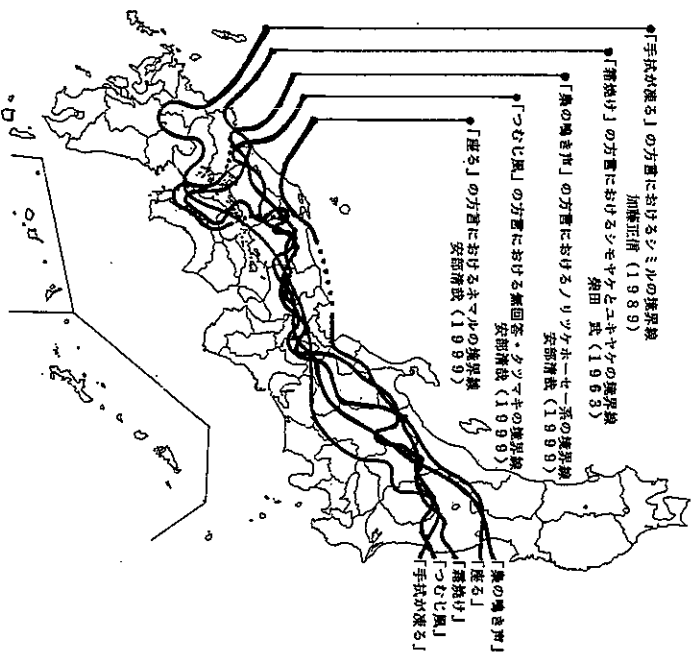


図2 「気候線」 境界帯と南北地域 安部清哉 (1999)

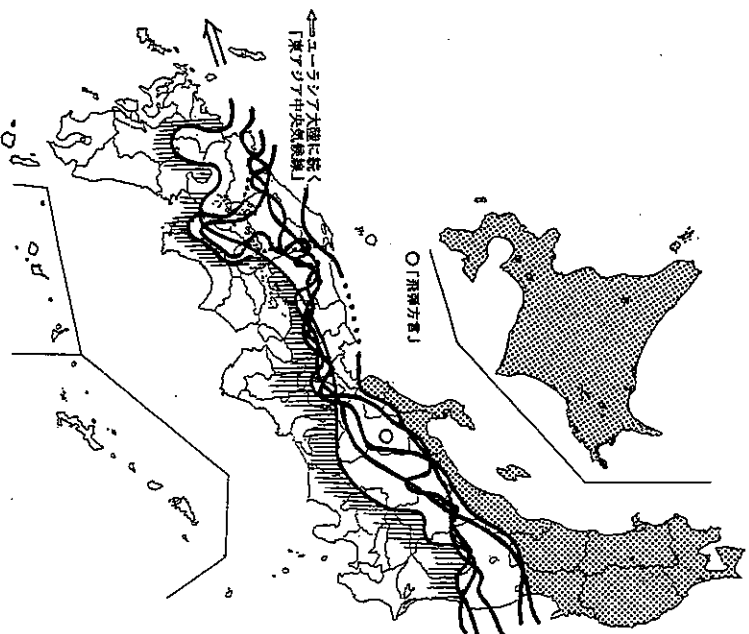


図3 「霜降り」の方言におけるシモヤケとユキヤケの境界線 柴田 武 (1963)

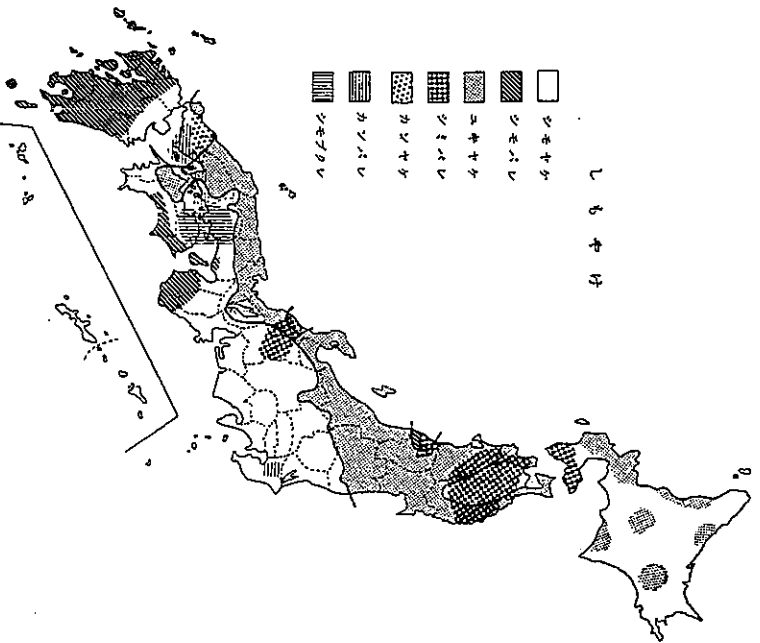
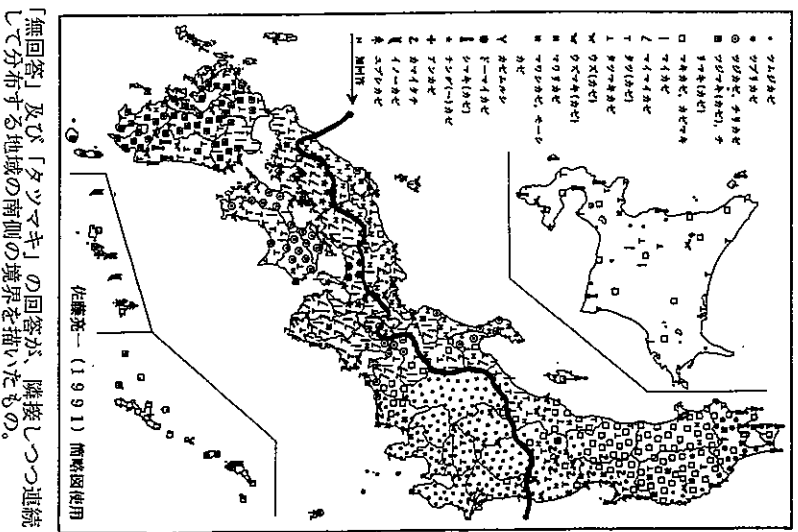


図4 「つむじ風」の方言における無回答・タツマキの境界線 安部清哉 (1999)



「無回答」及び「タツマキ」の回答が隣接しつつ連続して分布する地域の南側の境界を描いたもの。
佐藤亮一 (1991) 前掲図使用

図5 「鼎の鳴き声」の方言におけるノリツケホーセー系の境界線
安部清哉 (1999)

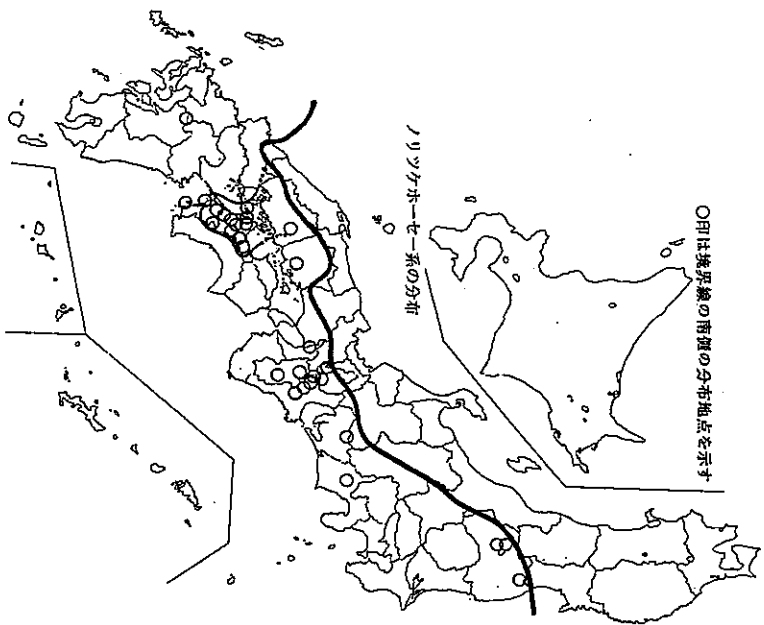
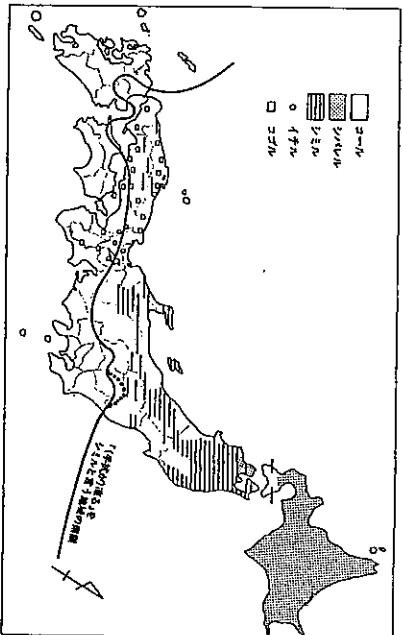
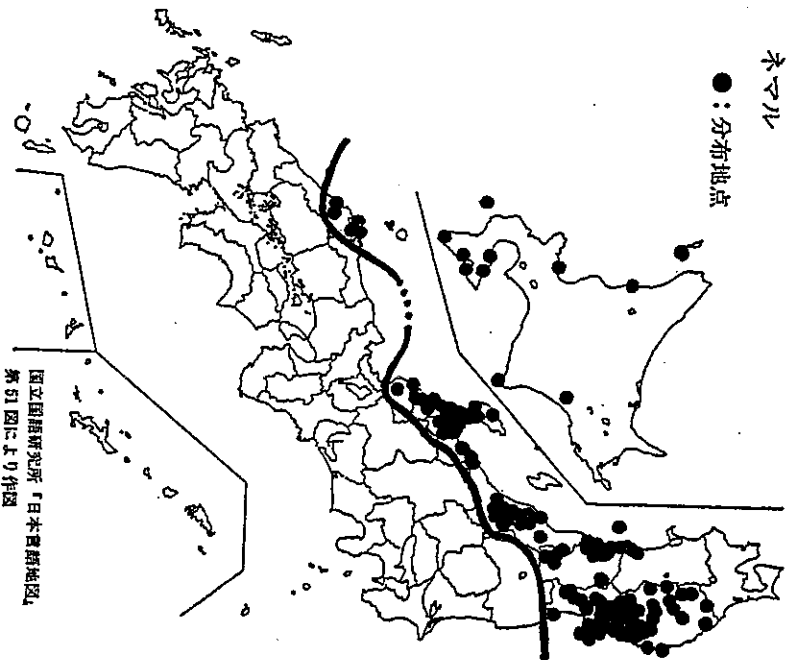


図6 「手拭が凍る」の方言におけるシミルの境界線
加藤正信 (1989)



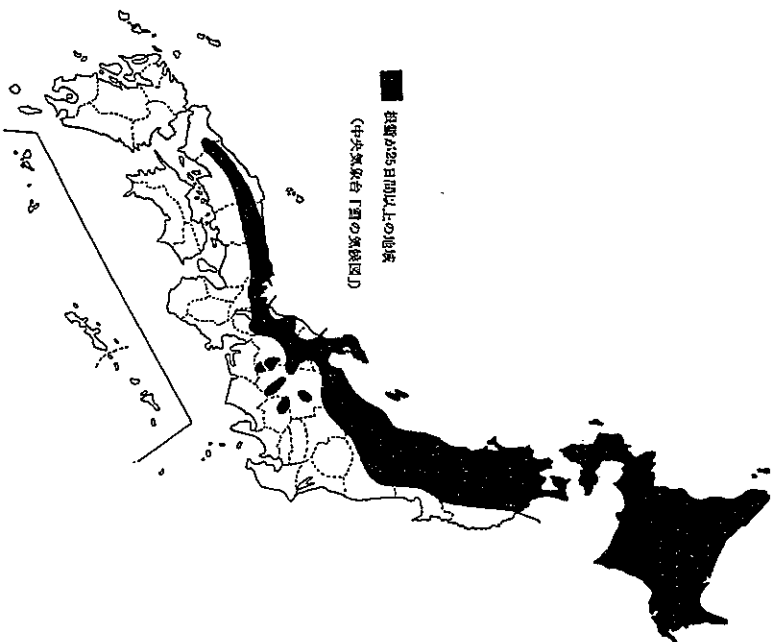
出典：『日本語地図』第2集 (1968), 96図, 97図による。
.....は安部の和正線

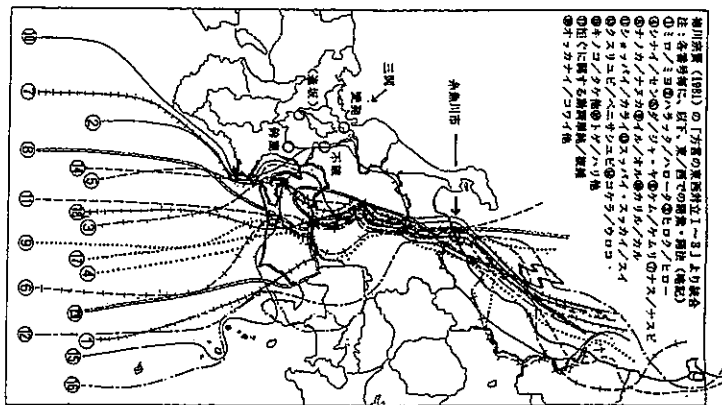
図7 「座る」の方言におけるネペルの境界線
安部清哉 (1999)



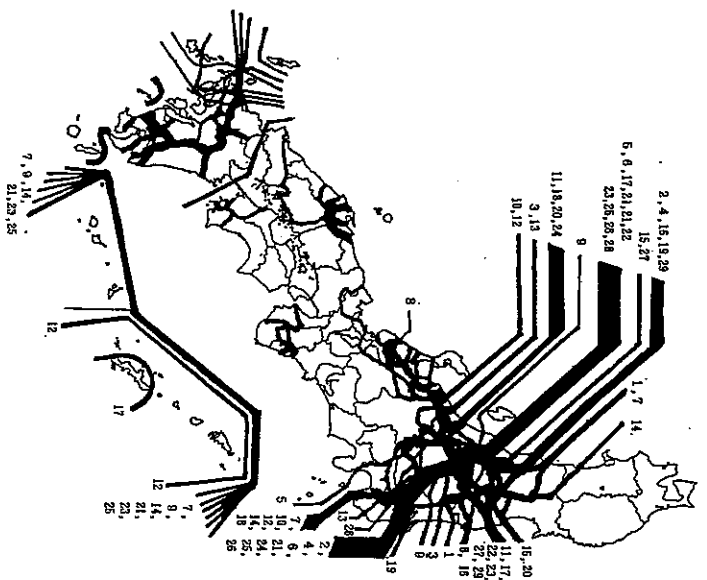
国立国語研究所「日本語地図」
第51図により作図

図8 根雪が25日間以上の地域
柴田 武 (1963)





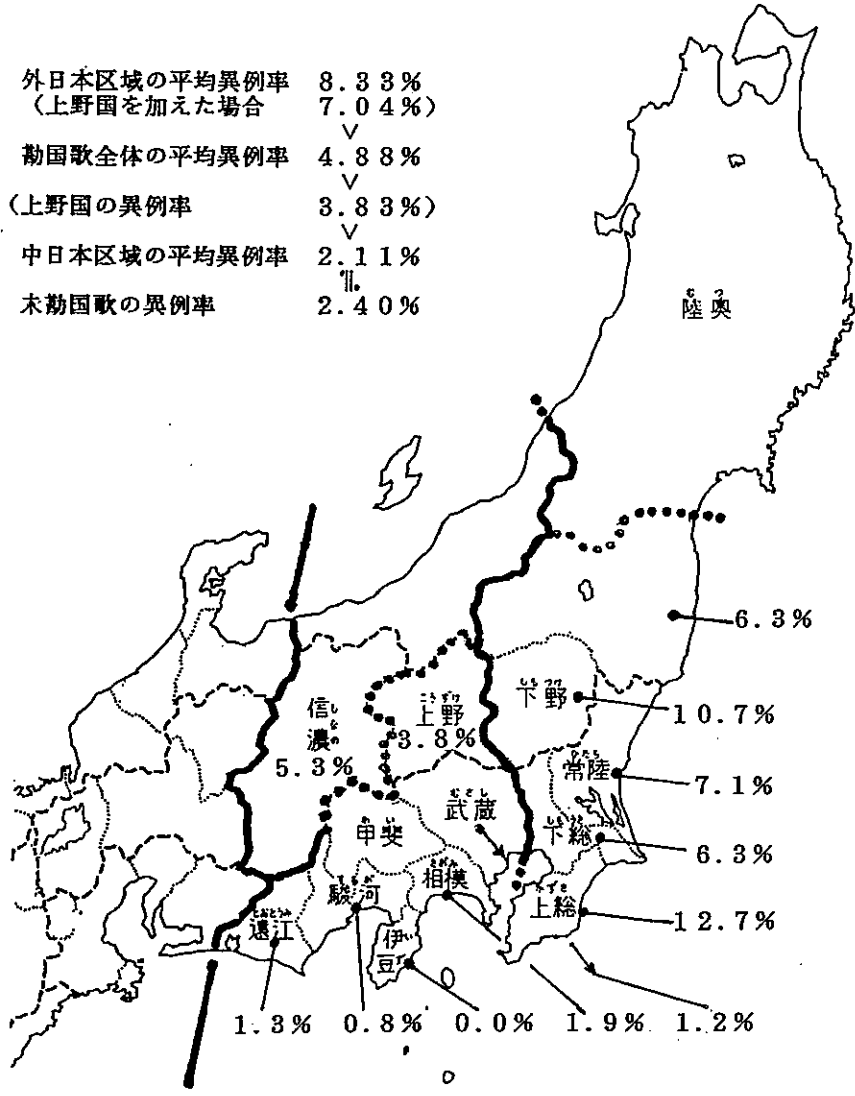
図Ⅰ 日本語方言における「糸魚川・浜名湖線」総合図
 「気候線」以外の方言境界線「糸魚川・浜名湖線」総合図とその機能類型
 「関東・越後線群」総合図とその機能類型



図Ⅱ 日本語方言における「関東・越後線群」総合図
 「気候線」以外の方言境界線「糸魚川・浜名湖線」総合図とその機能類型
 「関東・越後線群」総合図とその機能類型
 注：番号は本文参照。南西諸島を除く西日本の番号は省略。

図9 『万葉集』東歌・防人歌における上代特殊仮名遣の異例率と分布境界線
 安部清哉 (1999)

外日本区域の平均異例率 (上野国を加えた場合)	8.33% 7.04%
勸国歌全体の平均異例率	4.88%
(上野国の異例率)	3.83%
中日本区域の平均異例率	2.11%
木勸国歌の異例率	2.40%



数字のデータは、水島義治 (1984) と氏の私信による訂正による。
 外日本・中日本・勸国歌全体それぞれの平均異例率は安部の計算による。

表1 「子音性優位方言(東日本十周圏) / 母音性優位方言(西日本中央)」の機能類型 (安部1999補訂 (安部 (1993)))

分類	言語現象	子音性(東・周圏)	母音性(西日本中央)	先行研究/術語使用
1	母音の無声化	短く発音する (カワ、ゾチ)	目立たない	大野(1993)
2	促音挿入 (五助動詞連用形)	促音便形 (見)ロ	長く発音する(ホー)	野田(1993)
3	音節語	非音便形	音便形(買一タ)	野田(1993)
4	形容詞連用形	非音便形	イ音便形(落トイナル)	野田(1993)
5	一段の助動詞	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
6	特殊音節でのアク	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
7	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
8	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
9	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
10	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
11	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
12	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
13	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
14	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
15	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
16	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
17	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)
18	促音・子音/母音連続	東京式 アク核来ない	ウ音便形(白一ナル)	野田(1993)

注1 ○は指摘の目安。先行研究は柳田征司(1993)、安部(1993)参照。
 注2 語彙8*は、迫野(1971)の「カ」成立の解釈。
 注3 これらの背景として、安部(1999)では音節構造の相違の可能性を指摘した。上記中、音節構造に関わらない特徴は文法7・8のみ。7・8に因る子音は、d・r・jであり、これらは所謂「総合性優位方言/弁別性優位方言」(安部(1998))の相違に認められる音韻対応の法則(d-r/j)と類型性をもち、かつ「ゆ・らゆ」と中古「ら・る」から「てんちう(天童川)上代「ゆ・らゆ」と中古「ら・る」を同様に、d-r/jを背景にした交替形と位置付け得る。

「関東・越後線」の機能類型 II-表1~6

表1 「総合性優位方言(外日本)/弁別性優位方言(中日本)」の機能類型 (I)

分類	言語現象	総合的統一的特徴(外)	弁別的分析的特徴(中日本分布)
1	畦畔	クロ(田畑他の境界線)	アゼ(田に偏る) [意味限定]
2	肝をかく	鼻音ム鼻鳴ヲス[直接的]	イビキ [特定命名]
3	牛	ペー [オノマトペ・直接的]	ウシ [特定命名]
4	恐い	コワイ(堅強硬直全般)	コワイ(心理的硬直) [意味限定]
5	落ちる	オチル(落下・下降)	オチル(落下)/オリル(下降)[分化]
6	嗅ぐ	カム(嗅ぐ・辨む)	カム(辨む)/カグ(嗅ぐ)[分化]
7	灰	アク(灰汁滓塵芥他)	ハイ [特定命名]
8	眉毛	カオノケ[直接的表現]	マユ [特定命名]
1	中舌母音	○有 [i u非弁別]	×無
2	シ・ス	統合 [i u非弁別]	区別 [母音i uの弁別]
3	四つ仮名	一つ仮名[i u非弁別]	二三四つ仮名
4	i・e母音	統合 [i e非弁別]	区別 [母音i eの弁別]
5	カ行子音	非語頭有声化[非弁別]	有声無声区別 [子音清濁の弁別]
6	タ行子音	非語頭有声化[非弁別]	有声無声区別
7	アクセント	無型アクセント[非弁別]	東京・京阪・二型 [アクによる弁別]
1	格助詞ガ	不明示 [非弁別]	明示 [格機能の弁別]
2	形容詞	無活用 [非弁別]	活用完備 [接続機能の弁別]
3	敬語	無敬語方言 [非弁別]	身内敬語ほか [敬語機能の弁別]

表2 「総合性優位方言(外日本)/弁別性優位方言(中日本)」の機能類型 (II)
 不特定表現方言から「名付け」による特定命名方言への段階的变化(安部1998)

言語現象	即物的不特定表現(外日本)	特定命名表現(中日本)
1 肝をかく [LAJ 89]	鼻音ム鼻鳴ヲス [鼻の動作]	イビキカク
2 眉毛 [LAJ111]	カオノケ [顔にある毛]	マヨ (→マユ)
3 牛 [LAJ206]	ペコ・ペー [オノマトペ]	ウシ

表3 「総合性優位方言(外日本)/弁別性優位方言(中日本)」の機能類型 (III)
 子音(破裂音系)・母音の変化と併存による方言音声の弁別化・多様化の機能類型

子音・母音 変化と併存	中舌母音 →母音	両唇破裂 破裂→鼻音	両唇軟口蓋破裂 →両唇/軟口蓋	歯茎破裂 破裂→弾・硬口蓋	有/無 bdg
外日本方言	*I(u)	b	kw (gw)	d ⇄破裂音系	bdg
中日本方言	i/u	b/m	p・Φ・h/k	d/r・j (口蓋化)	-/ptk

注1 kw-p/k交替によって、「日高見国」(「記紀」)が、*kwitakamiを語源とするkitakami北上/pitakami日高見との派生関係として初めて説明可能となる。これは、「酸っぱい」における*suk'wa-si → sukka-i(東北方言)(cf. スカッとする)/suppa-i(中央語)、カカ/ハハ(母)、カウシ/ハウシ(俚)ククム/フム(含)等にもあてはまる。

表4 「総合性優位方言 (外日本) / 弁別性優位方言 (中日本)」の機能類型 (IV) アジア言語内方言間の「体系的音韻対応の法則・三対」 (安部1999)

位置	列島中央部	両唇	両唇軟口蓋 声門	歯茎	東ユーラシア中部
言語	日本語	破/鼻	破接近/破・摩・接近	破/弾・鼻	東アジア言語音
方言	外日本方言	b	(k+) *kw	d	中国北方語? / 中国南方語
地域	中日本方言	m	(p ⇄) h / fi	(r / j : n)	中国北方語

注1 日本語にも d-n 交替の片鱗が認め得る。シダ (東国・肥前) / シナ (時) [地理的にも一致]、ダ (木ダ物・毛ダ物) / ナ (の)、ヒダ (飛騨) / ヒナ (鄙)、マタ (mada・mat' a) / マナ (眼、マナ・コ → マ・ナ・コ) など。

表5 東アジアの言語に見られる「音韻対応の法則 (傾向) (仮説) (安部1999) The Triple Pairs of Sound Correspondence in East Asian Languages

東アジア地域	両唇音	歯茎音	両唇・軟口蓋・声門音	[破裂音]
	Bilabial	Alveolar	Labial・Velar・Glottal	Plosive
北方子音 North Consonant	b	d	kw	= +
南方子音 South Consonant	m	(r/n)	(p ⇄) h / fi	= -
[暗音 Grave]				+

表6 東アジア古層言語の「音韻対応の法則」の理論的再構成 (試論) (安部1999) The Triple Pairs of Sound Correspondence in Old East Asian Languages

東アジア地域	両唇音	歯茎音	両唇・軟口蓋・声門音	Distinctive Ptr.
East Asia Lng.	Bilabial	Alveolar	Labial・Velar・Glottal	口語Oral / 鼻音Nasal
北方子音 North Consonant	b ~ *p'	d ~ *t'	*gw ~ k'w	[Oral 口音性] Plosive 破裂音
南方子音 South Consonant	m	n	*ŋ (~ *ŋ ~ fi)	[Nazal 鼻音性] Nazal 鼻音
(地域的変異) Local Variant		(r)	(p → ⇄ → h)	(異層語の影響?) l(j) (the Influence of Other Stratum?)

注1 日本語・韓国語に見られる t(d) - r(l)(己) 対応 (例、蜂) も、この対応に間接的に関わり、祖語形 *p'adi (~ *ba·t' i) → pati (日) / pol (韓) と推定される可能性が認め得る。この点から見ても、表6の [d~t' - r] 対応は、この日・韓の対応とパラレルな関係にある可能性が推定される。

注2 地域的変異音の [r] と [p ~ ⇄ ~ h] は、それぞれ異なる理由によるものである可能性がある。

注3 アイヌ語の研究からは、子音 b・d・kw・g・ŋ のいずれも確認できない。

注4 「言語学者の大方は、一万年が言語の痕跡が残る限度だと考えている。」 (スティーブン・ピンカー『言語を生み出す本能』) と言われるが、それがどのような言語を視野に入れての推測であるか不明である。弥生時代以前の問題となれば、1万2千年前とも1万6千年前とも言われる縄文時代の範囲が対象となり、また、新・古モンゴロイドという問題も、視野に入らざるを得ない。いずれにせよ、この「日本語」は、世界の言語学者にとって、類い稀な、しかも、極めて貴重な、研究対象言語であることがわかる。

II-表3 (注 続き)

注2 b-m 交替では、12世紀初『悉曇要決』に、ボリ (越中越後) / モリ (森) 等がある。同書には「本朝北州 / 其音濁龍矣。 / 南州其音柔也。」とあり、外日本 (東北・北関東) の有声音・破裂音が中日本では鼻音に対応している、という傾向と、地理的に共通性が認められることがわかる。

注3 kw-p/k 交替現象によって、上代特殊仮名遣のイ段・エ段のカ・ハ・マ行 (キケヒヘミメ) は、いずれも唇音に関わるという共通性をもって生じている現象であることが明らかになる。(また、母音イ段・エ段は、「総合性方言対弁別性方言」の機能類型上も問題となる母音である。)

注4 注3とは逆に、上代特殊仮名遣のオ段の場合には、唇音性の音でも、唇の閉鎖を形成してしまうハ行マ行音 (ホ・モ) に共通して甲乙の別が、生じていないことになる (いま、『古事記』にしか確認されていないマ行での使い分けを除外する)。

注5 このように、一つには、(1)イ・エ・オ段の注3注4に挙げた現象は、全て両唇音に関わっていること、いま一つには、(2)オ段でもア行ワ行には甲乙の別がないこと (o-wo が、甲乙の関係を形成していた可能性) から見て、コソトノヨロの甲乙も、何らかの “唇音性” (labial) の問題に関わる現象と推定される。(例えば、母音オが、甲 o - 乙 *uo のような関係を形成していた可能性。*puo = po (*⇄uo = ⇄o)、*nuo = no。)

注6 これらから考えて、上代特殊仮名遣あるいはまた母音調和は、何らかの “唇音性支配 (The Bilabial Control)” (例えば、両唇音性や唇音性など) のもとにあった現象であった蓋然性が高いことになる。

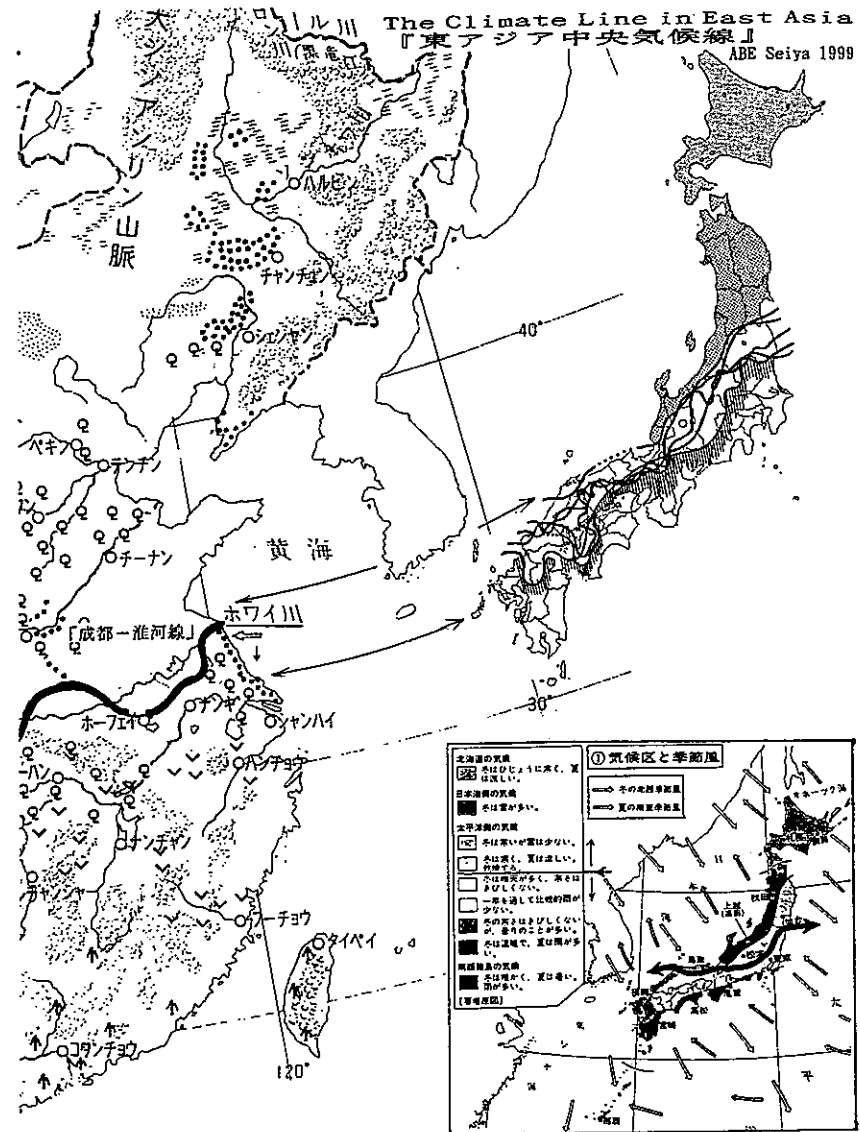
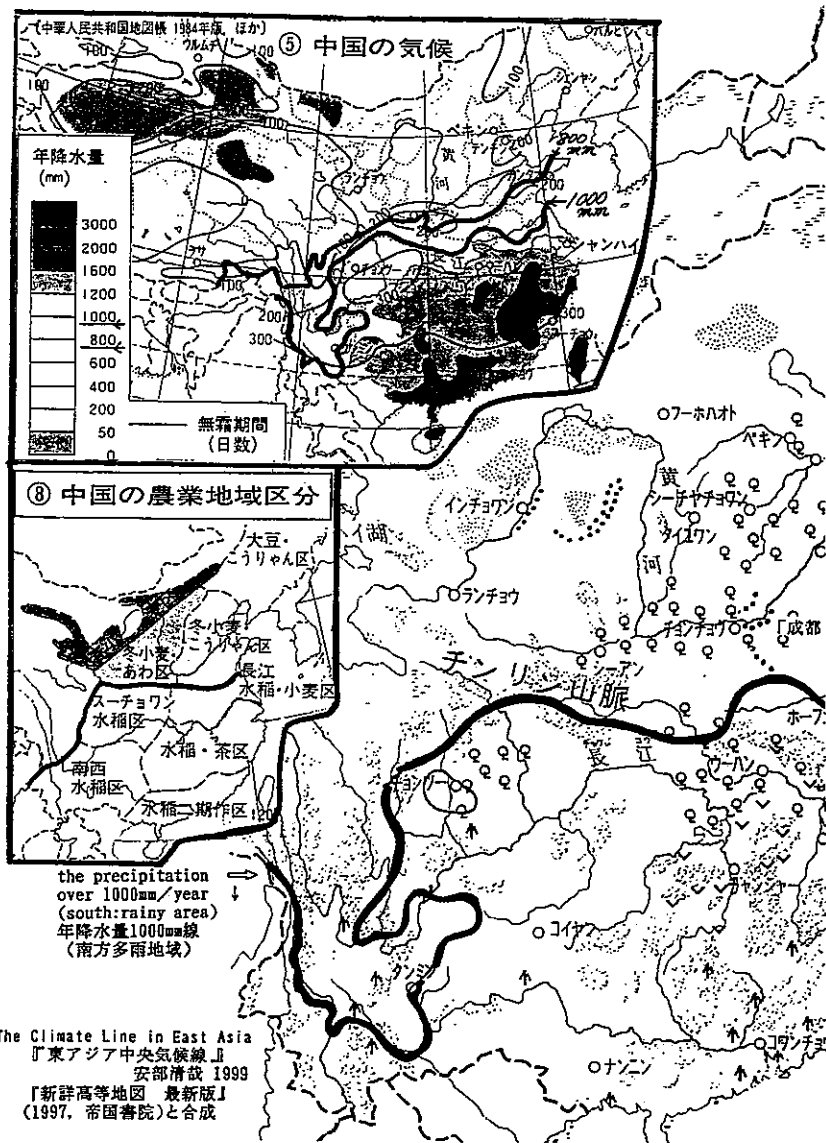
注7 そのような “唇音性支配” という体系性に立って見た場合、『古事記』にのみ見られるとされている「モ」の使い分けの現れ方のみが、この体系性の枠組みからはずれていることになり、他の上代特殊仮名遣とは異なった現象と見なし得る可能性が認められることになる。

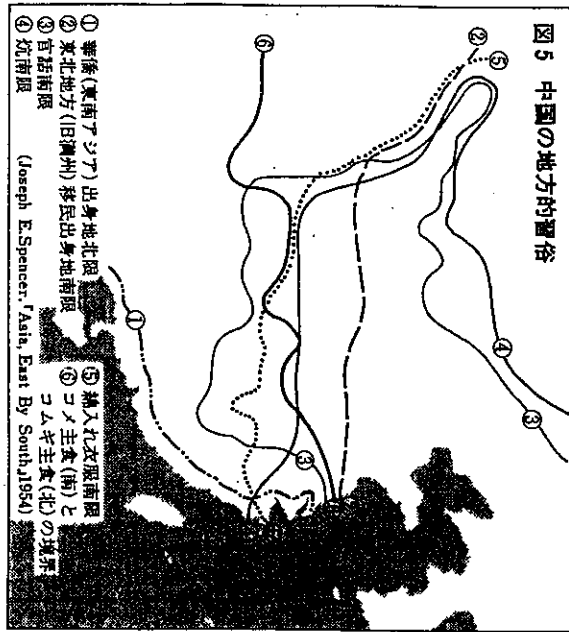
ただし、かつてハ行マ行でも共に使い分けが存在したものが、唇音のハ行 → マ行の順に消滅していった過程を留めている、という解釈ならあり得ようか。しかしその場合も、ハ行子音の変遷 (重化) を考慮すると、マ行 → ハ行の順 (「ホ」の方での残存) が可能性としては高いように思われる。

注8 注5のように、乙オ母音が唇音性の特性をもっていたとすれば、共起制限 (有坂法則) は、それと近似しつつも、その特性とは異なっている甲オ母音とは、共起しておらず、また同様であるウ母音とも共起していない現象であることがわかる。その点から類推すると、乙オ母音とア母音の共起制限においても、*uo の o の部分は (甲 o も)、母音 a により近似した開口度の大きい母音であった可能性があることになる。

注9 以上の注3~8は、kw-p/k 交替現象ひとつから、それが関わる上代特殊仮名遣および母音調和において、「(その解釈上説明が必要な) キヒミ / ケヘメ / コソトノヨロに限られて現れている “子音上および母音上の偏り現象”」の中に認められそうな体系性・整合性を考察してみた試論である。(イ段・エ段でも、カ・ハ・マ行という唇音にのみ限られて現れることの解釈だけが課題として残るかたちとなる。)

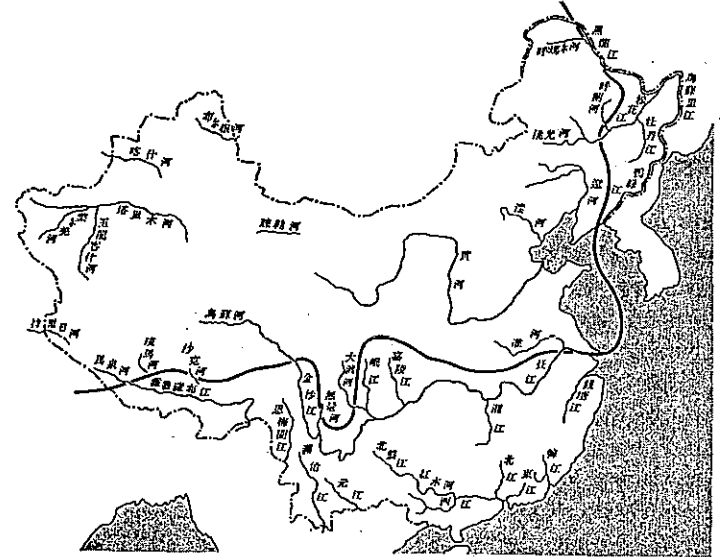
これらの解釈が、先行研究の指摘と一致してくるところがあるとするならば、それはまた逆に、推定の拠りどころとなった「kw-p/k 交替」現象を裏付けることにもなる。





図C 中国の地方的風俗の分布 大林太良 (1986)

図A アジア・太平洋地域における地域言語(方言)の分布と気候線 安部 (1999)
—中国における河川名「江/河」の分布 橋本萬太郎 (1981) より—

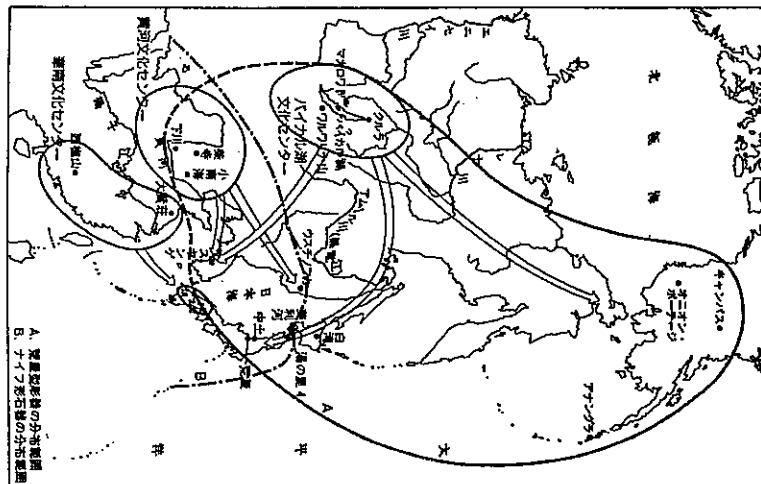


第59図 中国における川の名の分布

図B アジア・太平洋地域における地域言語(方言)の分布と気候線 安部 (1999)
—アジア大陸語における疑問詞語順「ダレ〜ダレカ」 橋本萬太郎 (1981) より—



第3図 アジア大陸語の「ダレ」と「ダレカ」



図D 3万年前〜1万年前の細石刃文化の拡散伝播 加藤晋平 (1986)